現代仏教学の危機

ジャン・ノエル・ロベール

ただいまご紹介に預かりましたロベールでございます。大谷大学でお話をさせていただくのは、多分これで三回目かと思います。初めて大谷大学によせていただいたのは、もう二十七年前のことです。この大学で安藤俊雄先生が教えておられていることを知り、当時ちょうど設立されたばかりの日本交流基金の奨学金をいただきまして、やってまいりました。残念ながら先生は一年ほどで亡くなられましたけれども、大谷大学は私の母校のように感じております。ですから、ここでお話させていただくことを、たいへん光栄に存じます。

今日の講演の題目を「現代仏教学の危機」とさせていただきました。このような題をつけましたのは、私の過剰反応かもしれませんが、この二年ほどアメリカで盛んになってきたいわゆる「批判仏教思想」が、私自身にとって大きな問題・疑問になってきたからです。そこでこれからご紹介しますこの新しい「批判仏教思想」という説が、果たしてどこまで妥当であるのか、あるいは我々仏教を勉強している者にどんな刺激になるのか、あるいはどんな利益が与えられるのかについて、すこし考えてみたいと思います。

この新しい仏教研究の方法を私は「批判仏教」と名づけましたけれども、その批判仏教は、ある観点から見ると、それができてよかったと思います。なぜかといいますと、日本へ来るたびに、京都でも東京でも自分の勉強について話をしろといわれます。しかし簡単に自分が今どんなことをやっているかということを述べますと、いつも日本の仏

教学の先生方はちょっとがっかりなさっているような印象を受けます。なぜかといいますと、やはり私はフランス人であり、仏教学に携わったものですから、当然ながらシルヴァン・レビーとかラモットとかプサン、さらにドミエヴィルというような先生方の伝統を汲んで仏教学を続けていると思って、私の話を聞いてくださっているわけです。しかし私の話を聞かれると前の偉い先生方とあまり関係のない勉強の仕方をしているのだと分り、皆さんがっかりされているのではないかという気がいたします。

ついこの三十年前までフランスやヨーロッパなどでは仏教学といいますと、文献学・歴史学が中心でした。つまり本格的な仏教学者であるためには、サンスクリット語と、場合によってはパーリ語とチベット語、そして漢文（古典中国語）と現代の専門文献を読むための日本語などを学ばなければなりませんでした。私は独学で、サンスクリット語も、そして特にチベット語も勉強しましたが、実は私の興味は最初から中国・日本の仏教、特に天台にありました。そのためインド学を中心にした仏教学をすることは、最初からぜんぜん考えていませんでした。私は、日本に着いたときから日本の仏教学者の皆さんと話をしていつも何か食い違いを感じていましたが、その理由の一つは、そのあたりにあるのではないかと思います。また逆にヨーロッパで仏教学関係の先生などとお話しをすると、例えばジャック・メイ先生などには、「どうして日本の天台宗の教義を勉強するのか」などと質問されていました。そのように私の学問は非常に中途半端なもので、仏教学でもなければ、日本学でもなかったので、私自身の立場を説明するのは非常に難しかったのです。ですから今顧みるとこれからお話する「批判仏教」の話は、ある程度は私を救ってくれるというような思想的方法といえます。

しかし、それはありがた迷惑だとも思います。なぜかといいますと、「批判仏教」の考え方にはあまり賛成できません。ある程度まで賛成できますけれども、でも納得のいかないことが非常に多いのです。そのため東京や京都で仏教学者の先生ともお話しますけれども、まだまだあまり知られていない運動であって、部分的な日本語訳はあるか

もしれませんが、その全体はまだ紹介されていませんし、日本にどんな影響を与えるかもまだよくわかりません。日本で流行していた「批判仏教」というのがありましたけれども、いま私のいう「批判仏教」は、その正反対の立場からの批判ですから、その両方がぶつかると非常に面白い結果になるのではないかと思います。

実はいま私が「批判仏教」と呼んでいるアメリカの思想（論理）についての決まった名称は、まだありません。ですから私は、それを仮にCritical Buddhismとか、「批判仏教」という仮の名前を付けることにします。

それに入る前にその基礎になっている一つの考え方を紹介したいと思います。皆さんすでにご存じだと思いますが、この近年発生した「批判仏教」の基礎にある考え方は、一九七八年アメリカで出版されて、和訳もされていますエドワード・サイード（Edward Said）氏の『オリエンタリズム』（Orientalism）という本に示されています。この『オリエンタリズム』という本は、アメリカだけでなく、日本にも大きな影響をあたえました。この二十年間の比較文化論などの発展をみると、この『オリエンタリズム』の影響で発達したものが非常に多いように思います。最近出版された中国と日本文学の比較研究、例えば『谷崎潤一郎と中国』などをみますと、『オリエンタリズム』の思想をそのまま使っているものが多いような気がします。

『オリエンタリズム』という本について、皆さんよくご存じだと思いますので、それについてあまり長く説明する必要はないと思います。一言で申しますと東洋学というのは一つの学問ではなくて一種の武器なんです。結局ヨーロッパの植民地主義と帝国主義を支える道具として使われてきた学問なのです。ですからその学問の目的は、オリエント（中近東をも含む広い意味での東洋）というものを「知る」ことではなくて、東洋というものを「作りあげる」ことなのです。オリエントという空想のイメージを構築し、それを我がものにして、結局東洋人の手からオリエントを没収することとなってしまうのです。そして自分勝手に作りあげたオリエントのイメージを操作し、そのイメージに当てはまらない、現実にいる東洋人はすべて堕落したものだと批判します。そしてそれら劣った人々を西洋の進歩し

た文明は救うべきだという口実で帝国主義と植民地主義の政策が行われるのです。

アメリカでもサイード氏への批判は多くあります。もちろん彼の立場は完全に間違っているとはいえないのですが、皆さんもすでに気付かれていると思いますが、サイード氏の学説は極めて特殊な事情から生まれてきたものです。彼はもともとパレスチナの出身なのですが、イスラエルという国家が成立したときに、エジプトのカイロに亡命しました。そこからアメリカへ渡り、アメリカの国籍を取り、コロンビア大学で英文学と比較文学を教えるようになりました。そのような状況の中で、イスラエルとパレスチナの間の戦争を常に念頭において、アメリカやヨーロッパの東洋学に潜んでいるオリエンタリズム的発想を批判したのです。ですから『オリエンタリズム』には政治的色合いが非常に強いのです。

私はそれ以上深く踏み込みたくないのですが、一つだけ問題としたいのは、オリエンタリズムという言葉の問題です。サイード氏のオリエンタリズムという言葉の使い方は、非常に悪くいえば不誠実だという気がします。なぜかといいますと、英語でもそうだと思いますが、フランス語の辞典などを引いても、オリエンタリスト、つまり東洋学者と呼ばれる人々は、まず言葉を勉強することが前提となっています。専門によって勉強する言語は違いますが、言語を知らないでオリエントについて語る人々は評論家や新聞記者であって、そういう人たちはオリエンタリスト（東洋学者・中近東学者）とはいえないのです。美術史の上に例えばジャポニズムがあるように、オリエンタリズム（東洋趣味）という流れもあります。美術史の中で、例えばオリエントの風俗を対象とするような西洋絵画の流れをオリエンタリズムというのですが、サイードは、オリエンタリズムという単語を東洋学という分野に当てはめました。かなり勝手な用法だと思います。このように、オリエンタリスト、あるいはオリエンタリズムの定義を操作することによって、普通は東洋学者としてまったく認められてない人々をも東洋学者にしてしまいました。例えばサイード氏の本を読みますと、東洋学者としてギュスタブ・フローベール（Gustave Flaubert）とかピェール・ロティ（Pierre Loti）

の名前があげられています。しかしこのような作家や旅行者や、あるいは精神的な思想家（ゴビノー［Joseph-Arthur Gobineau］とかそういう人なのですけれども）は決してオリエンタリストではなかったのです。ですからこの点でサイードの論理は適当ではないという気がします。

さらに具体的な例を一つあげますと、一九九四年に再版された『オリエンタリズム』の三〇五ページにとても面白い文章があります。サイードはCambridge History of Islam、つまりケンブリッジ大学が出版している権威あるイスラムの歴史の本を、オリエントを歪曲して紹介していると批判しています。具体的に言いますと、彼はオリエント人（つまりアラブ人）に対するヨーロッパ人の悪口の典型として、このCambridge History of Islamから一節を引用しているのです。それは初期アラブ文学の大部分は、ペルシャ人の手によって書かれた、あるいは完成されたという一節です。それでサイードはそれを読んで、これこそ具体的な名前もあげず、論拠もあげないで他者（ここではアラブ人のことですが）を中傷するヨーロッパ人の批判の方法、あるいは謗り方の典型的なものであると憤慨するのです。私はアラブ文学などは門外漢ですけれども、聞くところによるとそれはヨーロッパ人が言い出したものではなくて、もう九世紀の昔からイスラムの世界で盛んに行われていた論争なんです。ペルシャ人が始めた論争です。アラブ文学を作りあげたのは我々だというのです。それで九世紀にある作家は、それに反対してまた物議を醸したわけです。ですからサイードの文書を読みますと、それは完全にヨーロッパ人の作りあげたものとされていますけれども、そうではないのです。ヨーロッパ人はペルシャ人の言葉をそのまま受け入れたという点では悪いかもしれませんが、それはヨーロッパ人の作りごとではないのです。

その話はこれくらいにしておきますけれども、とにかくオリエンタリズムの批判思想は、このようにサイードから生まれたものです。しかしサイードの批判は、先ほど申しましたように地理的にも歴史的にも極めて限定された、いわゆる中近東を中心にした批判なのです。ですから主にイスラム学者を批判したものでした。つまりサイードは極東

とかインドなどにはほとんど言及していないのです。ちょっとインドには触れていますけれども、中国・日本などにはほとんどなにも言及していないのです。もちろん仏教についてもなにもいっていません。しかしそのオリエンタリズムの思想を取り込んで、一九九五年にチベット学者のドナルド・ロペズ（Donald S. Lopez Jr.）という人が、とても面白い論文集を編集して公開しました。それは、Curators of the Buddhaというタイトルの本で『ブッダの管理人たち』という意味です。Curatorsとは博物館の学芸員のことです。その中に集まっている六つの論文は、主にサイードの『オリエンタリズム』で行われていた批判の方法を今度は仏教学に当てはめようとしているものです。それぞれ非常に水準が違う論文ですけれども、確かに一貫した思想があると私は思います。ロペズ自身、最後の論文を書いているだけではなく、かなり長文の前書きも書いていまして、そのなかで「批判仏教」の思想的基礎を築づこうとしています。その中の論文をいちいち取りあげるわけにはいきませんが、特に日本学や仏教学だけではなくて思想史にも関係のありそうなものをいくつか紹介したいと思います。

六本の論文のなかで、ロバート・シャーフ（Robert Sharf）の“The Zen of Japanese Nationalism”（「日本国家主義の禅」）という論文は非常に面白いものですが、これは主に鈴木大拙の禅思想の成立過程について考察したものです。それでもう一つは、グスターヴォ・ベナヴィデス（Gustavo Benavides）の、ジュゼッペ・ツッチについての論文です。皆さんよくご存じのように、ツッチは有名なイタリアのチベット学者・仏教学者でしたが、この論文は“Giuseppe Tucci, or Buddhology in the Age of Fascism”（「ジュゼッペ・ツッチ、またはファシズム時代の仏教学」）というものです。そして私が一番楽しく読ませていただいたのは、ルイス・ゴメス（Luis Gómez）の“Oriental Wisdom and the Cure of Souls: Jung and the Indian East”（「東洋の智慧と魂の治療：ユングとインド的東洋」）です。それから最後にロペズの回想録のような“Foreigner at the Lama's Feet”（「ラマ僧に魅了された外国人」）です。このなかでロペズは、なぜ仏教学について疑問を抱くようになったかを自伝の形で語っています。これもなかなか面白い。この本はいつかは日本語

に翻訳されるかもしれないと思いますけれども、確かに翻訳する価値があると思います。しかし正確な論文もあれば、なかなかいらだたしいものもあります。

まずロバート・シャーフの“The Zen of Japanese Nationalism”ですが、これは先ほど申しましたように非常に面白いです。鈴木大拙先生の思想は、直接日本の禅の伝統を汲むものではなく、ドイツ出身でアメリカで活躍していた一人の宗教学者でありながら、神秘主義者、あるいは世界宗教を作ろうとしていたポール・ケーラス（Paul Carus）を媒介として形成されたものだというのです。ケーラスはある雑誌の編集をしていましたが、鈴木先生は彼のもとに招かれてしばらく秘書といいますか、助手として活躍なさっていたようです。それで鈴木先生の禅の再発見といいますか、日本と仏教の思想の再発見というのは、スエーデンの神秘思想家であるスエーデンボルグの影響を受けていたケーラスのもとで形成されたとシャーフは主張するのです。それで論文の後半では、鈴木先生の禅と国家主義との関係や、いわゆる京都学派の哲学者たちとの関係を分析しているのです。仮にシャーフ氏の歴史的な分析が正しいとしましたら（もちろん彼の提示している論拠は非常に多くて面白いのですが）、彼の論文の結論は何かロペズ自身の思想的立場とは相反するものではないかという気がます。

つまりシャーフ氏の論文を読んで強く感じることは、現代の禅思想は、鈴木先生などの努力によって明治以降に新しく作られたもので、近代以前の禅宗の自己理解と自己意識を研究する上では、あまり価値がないというようなことです。ですから後でまたそのお話に戻りますけれども、シャーフ氏もやはりオーソドックスな仏教学者としての価値観を持っていて、本来仏教はこうであるべきであるという価値観を基準にして、鈴木大拙先生や鈴木先生の教えを受けた西洋の禅宗の人を批判しているのです。とにかくちゃんとした学問があって、つまり仏教学があって、鈴木先生の禅思想はそれに当てはまらないものだとして批判しているのですから、ロペズ氏が批判し、否定しようとしている仏教学の立場をシャーフ氏はどうも支持しているようなのです。それで面白いことにシャーフ氏の研究の対象になっ

ているのは、鈴木先生が英語で書かれた禅についての本です。たとえばEssays in Zen Buddhismなどの本です。しかしシャーフは鈴木先生の仏教学者としての活動にはほとんど触れていません。先生の楞伽経の研究などにはほとんど触れていません。じつはこの論文集に出ているシャーフ氏の論文は、実はすでに他の雑誌に出版されていたものをこの論文集に再録したものです。この論文の後書きで、シャーフ氏はこれを書いた後いろいろな批判を受けたことを述べて、それについて弁解しようとしています。そのなかで鈴木先生はもちろん立派な仏教学者で、先生のお仕事の価値を否定してはいないと弁解しています。ですから批判仏教学ということを論じていながら、ある程度まで客観的な仏教学の価値を認めているというちょっとした矛盾を抱えていると思います。しかしこの矛盾といいますか、もの足りなさといった方がいいかも知れませんけれども、それは決してシャーフの論文の価値を下げるものではないと思います。

次にベナヴィデス氏の「ジュゼッペ・ツッチ、またはファシズム時代の仏教学」という論文も、だいたい同じ欠点があります。それは「批判仏教」の弱点を如実に示しているものであると思います。ご存じの通り、ツッチという人は、チベット学者であり、サンスクリット学者であり、さらには考古学の方面でも大いに活躍された方ですが、ベナヴィデス氏は、ツッチがムッソリーニ時代の国家を支持したということで批判しているのです。ツッチの仏教学は、ファシズム的なもので、また同じ理由でファシズムを支える道具だということを主張しているのです。この主張の論拠として、ベナヴィデス氏は非常に面白い文献を持ち出しています。先ほど申しましたように、ツッチが造詣の深かった言葉はサンスクリット語とチベット語です。漢文も多少知っていました。最初はかなり古典中国語を勉強し、大学時代の最初の論文は中国哲学についてのものだと思います。孟子か何かだと思いますけど、後はあまりそのような勉強は続けなかったようです。日本語についての知識は、私はよく分かりませんが皆無に等しかったのではなかったかと思います。しかし日本にはとても興味がありました。戦争中、ローマの日本大使館が編集した『大和』という雑

誌がありましが、そのなかにどうもツッチ氏は論文を連載していたようです。それらは「侍の精神」とか「日本の国家主義」などを唱えていたような記事・随筆でした。

ベナヴィデス氏は、そのツッチ氏の記事を拠りどころにして、ツッチの仏教学を批判しているのです。しかし面白いことに、ベナヴィデス氏の論文はツッチ氏の代表作である Tibetan Painted Scrolls（『チベットの絵画』）とか Indo-Tibetica（『インド・チベット論集』）とか、晩年に書いた The Religions of Tibet（『チベットの宗教』）などについてほとんど何もいわないのです。ですから仏教学者としてではなくて、むしろ随筆家としてのツッチの悪いところに言及しているのです。つまりシャーフ氏と同様に、ツッチの本質には触れていないのです。結局ほとんど遊びみたいに書いているものを拠りどころとしているということは、批判にならないという気がいたします。

つぎに、この論文集の中で最も面白いのは、やはりゴメス氏のユング批判だと思いますけれども、それもまた論理は一緒です。これはユングのインド修行の仕方など、インドの智慧などを修行して自分の哲学といいますか、自分の学説を成り立たせようとしていることを非難している論文です。もちろんユングはオリエンタリストではありません。東洋の言葉を一つも知らなかったのです。ですからチベット学者であるゴメスのユングに対する批判は、客観的にきちっとした学問的な標準を持っている仏教学の立場からなされている批判なのです。つまり「批判仏教」といっても、仏教学を批判するのではなく、ゴメス氏の頭にあるのは我々がするような仏教学を批判の道具として、非学問的な仏教学を批判することなのです。

例えば皆さんよくご存じのように、ユングは『チベットの死者の書』（The Tibetan Book of the Dead）を非常に大切にしていました。『チベットの死者の書』はエヴァンズ・ヴェンツ（Evans-Wentz）という人とあるチベット人が一緒に英訳したものです。もっと正確にいうと、訳はほとんどチベット人のものであって、エヴァンス・ヴェンツはそれをまとめただけなのです。そのため学問的には、あまり価値がない本です。しかしその『チベットの死者の書』

はユングの哲学のなかで大きな役割を担っているのです。それにしてもゴメス氏の論文は、ユングの心理学には学問的な基礎がないことを証明するだけで、かえって学問としての仏教学の立場を強くするのではないかと私は思います。

それでこの論文集の最後にあるロペズ氏の「ラマ僧に魅了された外国人」も面白いのですけれども、どこが面白いかというと、ロペズ氏は自分自身のことをあまりよく理解していなかったのではないかという気がします。彼のドクター論文のテーマは、確か般若経関係の中世チベットの注釈書であって、その注釈書を編集・翻訳しながら、あるチベットのラマから生きた注釈の伝承を聞き、その両方の注釈を一緒に使って論文を書こうとしたものです。ちゃんとした指導教員がついていたら、どちらか一つを選ぶように指導したはずです。しかしロペズ氏は両方の注釈を混ぜて論文を書いたのですが、それではやはり不可能であるということに気づいたようです。結局どうもこの経験がロペズ氏の批判思想の源になったらしいのですが、それは何となく私はすべて単に方法論の問題であったような気がします。

以上お話ししてきたように、一九九五年に出たCurators of the Buddhaは、どうも「批判仏教」という新しい学問分野の骨子を提示した本といえるようです。そこで同じ思想の延長で、同じくロペズ氏は一九九八年にPrisoners of Shangri-la（『シャングリラの囚われ人』）を出版しました。特にチベットに興味がある方には是非読んでいただきたい本ですけれども、これはロペズ氏一人の随筆集といいますか、いくつかのテーマを取り上げてヨーロッパやアメリカのチベットに対するイメージを批判的に研究したものです。

ご存じかと思いますけれども、ヒルトンという人が昔『失われた地平線』という小説を書きまして、それは後に映画にもなりました。その小説のなかでシャングリラという場所が出てきますが、それはヒマラヤにある一種の不老不死の国です。小説では飛行機で遭難した人がそこに辿り着いて、結局シャングリラを出られなくなってしまうのです。出ると浦島太郎みたいにまた年を取ったり、あるいは普通の人間になってしまうということなのです。シャングリラはシャンバラというチベットの神話の国からヒントを得た作り出された場所ですけれども、ロペズ氏はシャングリラ

を想像上のチベットそのものの象徴と理解しています。つまり西洋人のイメージするチベットの象徴としてシャングリラという言葉をつかっているのです。

この本のなかには六つの論文が収められています。最初の論文は、“The Name”（「名前」）です。そこでは、どうしてチベット仏教のことを「ラマ教」と呼ぶようになったかについて論じられています。実はこの問題についてロペズ氏は、すでに前の Curators of the Buddha のなかで触れていたのですけれども、ここでの彼の説は非常に単純でした。彼が言うには「ラマ教」は仏教学という学問を創った。ヨーロッパ人（ロペズはやはりアメリカ人ですね。アメリカ人はいつもヨーロッパ人を悪者にしてしまいますけど）はチベット仏教を仏教学の正しい対象ではないことを示そうとして、あえてチベットの仏教を「ラマ教」と名付けたというのです。これがロペズ氏の説です。それで Curators of the Buddha では、すでに注に誰かに言われて気がついたと述べているのですけれども、その「ラマ教」という言い方はヨーロッパで生まれたのではなくて、中国で生まれたのです。北京の擁和宮の乾隆帝の碑文には、「ラマ説」という表現がありまして、それはかなり複雑だった清朝とチベットの国教であるゲルク派との関係について述べている興味深い文書のなかに見られます。ですから「ラマ教」というのは、先ほどのサイードのペルシャとアラブの事が、いかにもヨーロッパ人の作り話だったということに近い誤解だったのです。「ラマ教」はヨーロッパ人が作り出したものではなくて、すでに中国とチベットの歴史のなかに出てきた言葉で、ヨーロッパ人はそれをそのまま受け取っただけなのです。

とにかく今度の“The Name”の中では、どうしてヨーロッパ人がチベットの仏教を指す言葉として中国で生まれた「ラマ教」という名前を使うようになったかという問題を批判的に興味深く論じています。もちろん結論は皆さんもおわかりだと思いますけれども、「ラマ教」は本当の仏教ではなく、チベットの学僧・僧侶・ラマたちはインド仏教について論じる権利も資格もないということを強調するために使われてきたというものです。

次に二番目の論文である“The Book”（「本」）は『チベットの死者の書』の話で、エヴァンス・ヴェンツの訳した本に影響を受けて非常に西洋化された仏教を欧米に伝えたアナガリカ・ゴヴィンダ（Anagarika Govinda）というお坊さんを取り上げています。アナガリカ・ゴヴィンダという人は、多分日本語にも翻訳されていますが、もともとドイツ出身の人で、いつも自分のことをラマ・アナガリカ・ゴヴィンダといっていました。ロペズ氏は「ゴヴィンダはチベット語などは知らないで、自分で勝手な仏教を作った人だ」ということをかなり面白く風刺的に述べています。それも先ほど述べた論理と一緒です。チベット学者であるロペズ氏の視点から、つまり学問的チベット学の立場からアナガリカ・ゴヴィンダの仏教を批判していて、非常に面白いのです。

“The Book”では、さらに『チベットの死者の書』に関連してユングのことも扱っていますが、これも非常に面白いです。ここではユングが東洋思想に接するときの態度は、植民地化時代の実業家・事業家の態度と同じだと述べられています。ロペズ氏は次のように言っています。“He mined Asian text for raw materials without acknowledging the violence he did to the text in the process.”つまりユングは自分の思索の原料となるものをアジアの文献から採掘したが、その過程のなかで文献を暴力的に扱ったこと（つまり文脈を無視して歪曲して都合のよいように文献の中の思想を取り込んだこと）を認めはしないということです。もっともだと思いますけれども、それはなんども繰り返しいいますけれども、それもやっぱり学問・仏教学という観点からしかいえないことなのです。

三番目の論文は“The Eyes”（「眼」）という名がつけられています。一九五六年にイギリスで出版された『第三の目』（The Third Eye）という本がありました。著者はロプサン・ランパと自称していた人ですが、彼は実はイギリスの水道屋さんだったのです。彼はラマと称して、結局自分は本当のチベット仏教を西洋にもたらす使命を受けたラマだということをいって『第三の目』を書いたのです。その本はたいへん成功しました。ここで言うべきことでないかも知れませんけど、私は十五歳のときチベット語を勉強し出したのはこの『第三の目』を読んでからでした。です

からそれだけの価値があったかもしれませんけれども、ロペズ氏はその『第三の目』を面白く批判しています。四番目の“The Spell”（「呪文」）は、「オムマニペメフム」という有名なマントラにたいする西洋で行われた解釈の歴史などに触れています。

このようにだいたい同じような理屈で、西洋人の持つチベットのイメージを繰り返し検証しているのですが、私はロペズ氏の批判の一部分はかなり当たっていると思います。しかし同時に彼がまったく気がつかないこともあります。例えばシャングリラという観念は、いかにも西洋的な観念だとロペズ氏は言い、ヒルトンがチベットを不朽の国と絵がいたのは、実はヨーロッパにしかありえない考え方で、東洋人から東洋を奪い取る結果になったというようなことをいっています。しかしロペズと全く関係のないところでジョーダン・ペーパーJordan Paperというアメリカ人の中国学者が“Eremitism in China”（「中国における遁世主義」）という論文を出しています。ロペズ氏の本を読んでいないみたいですけれども、その中でペーパーはヒルトンの小説について一言触れるのです。ペーパーによりますとヒルトンのシャングリラの観念はどこからきたかというと、陶淵明の『桃華源記』に描かれている桃源郷からきたというのです。ただ陶潜の想像した国をチベットに移しただけなのです。ロペズ氏はぜんぜんそういうことは考えていないのです。いかにもヨーロッパ独特の考え方だと思っていますが、シャングリラのような発想はだいたいどこにでもあったようです。

それでロペズ氏の編集した論文集も、ロペズ氏自身のPrisoners of Shangri-laもとても面白いですから、読むべきものだと思いますけれども、最近その思想をもう少し革新的に発展させているのが、リチャード・キング（Richard King）という人（イギリス人だと思いますが）の、一九九九年にでたOrientalism and Religion: Postcolonial Theory, India and “the Mystic East”（『オリエンタリズムと宗教―ポスト植民地主義論理とインドと「神秘的東洋」』）です。このタイトルからすでにその内容はだいたい想像できます。そして読んで見ると、予想したとおりの論理を押

し進めています。しかし第七章だけは、我々仏教学に興味のある者には読む価値があるかもしれません。第七章は“Orientalism and the Discovery of “Buddhism”（「オリエンタリズムと「仏教」の発見」）です。ここでBuddhismにはすべて括弧が付けられています。つまりBuddhismという単語自体は、もうすでに括弧付きの、マークされた単語になっているのです。それは、ロペズ氏の説に基づくものです。ロペズ氏などがいうにはBuddhismは西洋人の作りだした観念です。Buddhismという言葉自身は、東洋にはなかったのです。それは彼の批判思想に対する非常に根本的な反論の論拠になると私は思います。彼はチベット学者です。チベットには明らかにBuddhismという単語はないのです。「チョー」（chos）といったりはしますが、仏教とはいいません。しかし彼の知らない中国語（漢文）や日本語には仏教という言葉がありまして、独立したかたちで仏教が考えられていました。「三教」という思想は昔からありまして、宗密の『原人論』とか、空海の『三教指帰』とかありました。つまり東アジアでは仏教は常に儒教や道教と対比されていました。日本に伝わると、例えば富永仲基も『出定後語』のなかで仏教・道教・儒教を一括して考えていますが、『翁の文』という日本語で書いたとても面白い論文では、仏教・儒教・神道となっています。ですからいつも仏教という観念は、東アジアでははっきりしているのです。つまり仏教というはっきりとした観念は、西洋ヨーロッパの仏教学者の作り出したものではないのです。

ですから私が避けようとしていた昔の伝統的な仏教学というのは、決して植民地主義や帝国主義の道具ではなかったのです。例えばツッチを例にとりますと、ツッチはイタリア人でした。ファシズム時代のイタリア帝国主義の対象はエチオピアでした。エチオピアはもちろん仏教の国ではなくてキリスト教の国でした。それでエチオピア学は、イタリアでは盛んに行われました。エチオピア学がイタリアで盛んになったのは、直接の利害関係があったからといえますが、イタリアは極東には何も手を出そうとしていなかったので、そこには当てはまらない理屈だと思います。

インドを中心とした仏教学の原点は帝国主義や植民地主義ではなくて、ヨーロッパで昔から行われていた文献主義

(philology) です。ギリシャと古代ローマの文献を研究することは、昔のヨーロッパでは最高の学問でした。ギリシャ語やラテン語の文献は、写本にしたものでしか伝わらなかったのです。その写本は、中世という長い時代を経て、何回も書写される間に、いろいろな間違いも入りつつ、十五世紀のルネッサンス時代まで写本として伝わってきたのです。文献は書写されるあいだに多くの間違いや誤字が入り込んできます。そのため文献を十八世紀前のもとの姿に復元することが文献学者の最大の課題でした。

インド学者たちは、その方法をそのままインドの文献に移しただけです。文献学は誤りの多いネパールの写本を復元したり、漢訳仏典以前のサンスクリット原典を復興するための道具に過ぎないという単純な発想でした。そのため文献学者自身と原典の間の伝統は邪魔なものに過ぎないという考えも起こりましたけれども、それは思想的・イデオロギー的なものではありませんでした。ある政治家たちはそれをイデオロギーとして使ったかもしれませんが、例えば帝国主義の最大の対象だったインドという国では、仏教は遠い昔に消えてしまっていました。仏典を復元したといっても、別にヒンズー教のインド人にはあまり関心を起こさなかったと思いますので、その批判はどうも外れているのです。

ロペズ氏やキング氏の批判を分析するのは非常に困難です。しかし彼らは完全に無視していますが、彼等の批判の対象として最もふさわしいのは、実は他にあります。それは十九世紀から二十世紀に盛んに行われていたオカルト思想です。それはもちろんオリエンタリズムに近い思想運動でした。オカルト思想は十九世紀に起こったいわゆる「知恵の発見」と密接な関係を持っています。そしてこのオカルト運動こそ、ヨーロッパ人の東洋に対する基本的イメージを創りあげたものなのです。例えばブラバツキー (Blavatsky) とか、フランスでたいへん大きな影響を及ぼしたルネ・ゲノン (René Guénon) などもオカルト運動に属する人々です。ゲノンは一九四九年にエジプトで亡くなった人なのですけれども、彼はヒンズー教を勉強した人でした。ほとんどサンスクリット語を知らなかったのですが、国家

博士号を取ろうとしてヒンズー教についての論文を書いたのです。フランスの国家博士号を取れそうな膨大な一〇〇〇ページくらいの論文を書いて、当時最も権威のあったインド学者のシルバン・レビーのところにそれを持っていったのです。しかしレビーはその論文を断ったのです。それで当時のフランスではたいへんな論争が巻き起こりました。いかにも本当の「東洋の知恵」を把握していたかのように思われていたゲノンの論文は、アカデミックの象徴だったレビーによって抹殺されたとオカルト派の人々は厳しく反論したからです。

ゲノンは本当に読みづらいです。内容はあまり面白くないですし、それで原典などもやはり分かっていません。彼がいつもいっている“Orient”とか“the East”とか、東洋という概念をまったく分析しないで使っているのです。しかしそれでも東洋の正しい思想を西洋に伝えたのは、僕だけだと主張するのです。

ゲノンも、数多いオカルト主義者の一人に過ぎないのです。ほかにもたくさんそのような思想を持つ人がいたのです。その中で面白いと思われる人物の一人にアレクサンドラ・ディヴィッド＝ネール（Alexandra David-Neel）という女性の旅行者がいます。彼女は一八六九年生まれで百歳まで生きた長命な人ですが、彼女は完全にシルバン・レビー先生の崇拝者で、レビーの注意を引くような論文を書こうと夢見ていました。しかし彼女はロペズ氏の批判しているような、仏教学を自分の目的にあわせて取り込もうとした西洋人の象徴ともいうべき人だったのです。彼女はちょっと哲学などに興味がありまして、書簡とか旅行記などを読みますと彼女は旅行中にチベット地方のラマたちから仏教を教えられたので、仏教をよく分かっていると自負していたことが知られます。とにかく彼女は哲学・形而上学の立場からチベットのラマ教とインド仏教の奥義をわかったと主張するようになりました。それでチベットの仏教などは迷信に過ぎないということは何遍もいっています。彼女はもちろん神知学（Theosophy）にも関心がありました。神知学が組織していたTheosophical Societyの会員にもなったのですが、後にそこから退いて、自分なりの宗派を作ったのです。

そういうオカルト関係で、もう一人面白い人物に、マッチョイというフランス人の植民地の軍人がいます。マッチョイという名前はベトナムの名前だと彼は説明していましたが、彼は道教などをヨーロッパに紹介しようとした人でした。漢文はほとんど知らなかったのですけれども、あまり漢文をよく知らなかったベトナム人を搾取して、道徳経などをめちゃくちゃな間違いだらけのフランス語に翻訳しました。彼もやっぱり同じように抽象化した東洋・神秘化した東洋思想を唱えていた人なのです。

ですからロペズ氏たちの批判の確かな基礎を作ろうとするならば、もっと欧米のオカルト的環境に目を向ける必要があると思います。最近フランスではそのような研究が盛んになされていますが、その結果オカルトと政治とがかなり密接な関係を持っていたことが分かるようになりました。それは十九世紀から戦前の時代に言えることだと思います。私は植民地主義と帝国主義の思想的基礎の一つとなったのは、オカルト思想であったのではないかと思います。最近フランスでは毎年『ブリディカ・ヘルメディカ』という論文集が出版されています。それはフランス革命から現代に至るまでのオカルトと政治の関係を研究している論文集です。非常に面白いです。今日のお話しの問題を直接取り上げた論文は発表されていませんが、私はその研究班で研究を進めたら非常に面白いのではないかという気がします。

時間が迫ってきましたので、最後に一つ質問のかたちで私の話を終えたいと思います。もしロペズ氏などの立場が正しいとしたら、これからの仏教学では何をいえるのか、どんなふうに研究を進めるかということが非常に難しくなってきます。なぜかというとその人の研究の結果が評価されるのではなく、その研究の動機が評価されるようになるからです。ハイデッガーの弟子で後にアメリカで活躍したハンナ・アーレントという哲学者がいますが、彼女の作った言葉に「疑惑の時代」というのがあります。なぜある人はある特定の研究を行うのか、どんな目的でその研究をするのか、今このような課題が問われるようになったとして「疑惑の時代」という言葉を作りました。このようなこと

を考えるのは面白いかもしれませんが、同時にたくさんの問題が生まれてくるでしょう。

具体的な例をあげましょう。なるべく日本のことではなくチベットの仏教についての具体的な例をあげたいと思います。ロバード・マイヤー（Robert Mayer）氏が一九九八年にJournal of the International Association of Buddhist Studiesに発表した面白い論文があります。それは“The Feature of Maheśvara / Rudra in the rñiṅ-ma-pa Tantric Tradition”（「ニンマ派タントラの伝統におけるマヘーシバラ（大自在天）・ルドラ（黒天）の姿について」）です。かなり戦闘的に話を進めていますが、どうしてそれを例にしたかといいますと、私と同じ宗教学で学位を取った若いフランス人のチベット学者がいますが、彼はマイヤー氏の見解に近い結論に達しました。一言でいいますと、この若いチベット学者はニンマ派だけではなくて、ゾクチェンというニンマ派の中の神秘的な教義を研究していて、特にニンマ派とゾクチェンにおけるシバ神の影響を取り上げています。そういうような研究が行われると、チベット人の坊さんの大部分は反対するのです。そういうことはないというのです。シバ神の影響があるなんて考えられないと。これは余談ですが、実は私は彼の論文審査員にもなっていて、彼の説を批判したのですが、後で彼が正しかったということに気づきました。とにかく、シバ神の影響があったということを論じることはチベットの学僧が本来持っている正当な学説に反するものです。皆さんはそのジレンマはよくわると思います。そういう研究を続けると、本来の立場はますます誤りであるということになり、仏教学、あるいは私の場合ですと天台学の立場を否定し、現地の学者からその学問を取り上げられてしまうような結果になるのではないかと思います。私はこのような問題にどう対処してよいか分かりません。シバ教の影響があって別に悪くないと思いますが、それはチベット学者の一部分も認めてますけれども、非常にデリケートな問題になってしまうのです。今までの仏教学の立場だったら問題はなかったのでしょう。それは学問ですから、どんな影響があってもその研究はあくまでも進めなければならないということなのです。しかしもし学問、純粋な客観的な学問的立場からそういう研究を進めて、その結果、信仰者から「それはオリエンタリズムだ」

という批判を受けたらどうなるでしょう。仏教学を学んでおられる皆さんそれぞれが答えを持たなければならないと思います。私はそういういささか老人の寝言のような質問を提示して、今日のお話しを終えたいと思います。どうもありがとうございました。

本稿は一九九九年十二月十四日（火）に行われた仏教学会主催の公開講演会の録音テープを原稿化したものである。原稿化するに際してロバート・F・ローズ氏のお手をわずらわせた。